

執筆者紹介

清水奈名子 Shimizu Nanako

一九七五年生まれ。宇都宮大学国際学部准教授。国際機構論。『冷戦後の国連安全保障体制と文民の保護—多主体間主義による規範的秩序の模索』『Human Insecurity Caused by the Dysfunction of the State: New Security Issues in the Post-Fukushima Japan』『危機に瀕する人間の安全保障とグローバルな問題構造—東京電力福島原発事故後における健康を享受する権利の侵害(前編・後編)』

竹峰誠一郎 Takemine Seichiro

一九七七年生まれ。明星大学人文学部准教授。国際社会学、グローバル・ヒバクシヤ研究。『核時代のマーシャル諸島—社会・文化・歴史、そしてヒバクシヤ』(共著)、『マーシャル諸島—終わらなき核被害を生める』

徐正源 Xu Zhengyuan

一九七八年生まれ。中国人民大学国家発展與戰略研究院 国際関係学院副教授 国際関

係。『中国負責任大國角色的建構—角色理論視角下的実証分析』『Redéfinir les relations sino-américaines : une perspective chinoise』『In the Shadow of Great Powers: A Comparative Study of Various Approaches to Regionalism in Central Asia』

大澤肇 Osawa Hajime

一九七七年生まれ。中部大学国際関係学部講師。中国近現代史。『新史料からみる中国現代史—口述・電子化・地方文献』(共編著)『文革—南京大学14人の証言』(共訳著)『中華人民共和国初期における学校教育と社会統合』

ビートライス・トレフォルト Beatrice Trefalt

一九六九年生まれ。Senior Lecturer, Japanese Studies, Monash University. アジア現代史。『Japanese War Criminals: the Politics of Justice after the Second World War. Competing Voices from the Pacific War, Japanese Army Stragglers and Memories of the War in Japan, 1950-1975』

バラク・クシュナー Barak Kushner

一九六八年生まれ。ケンブリッジ大学アジア中東研究学部日本現代史リーダー。日本現代

史。『Men to Devils, Devils to Men: Japanese War Crimes and Chinese Justice; The Thought War: Japanese Imperial Propaganda (邦訳『思想戦大日本帝国のプロパガンダ』)』『Examining Japan's Lost Danks (共編)』『検証 日本の「失われた20年」—日本はなぜ停滞から抜け出せなかったのか』

和田英穂 Wada Hideo

一九七三年生まれ。尚絅大学文化言語学部准教授。中国近現代史、日中・日台関係史。『被侵略国による対日戦争犯罪裁判—国民政府が行った戦犯裁判の特徴』「戦犯と漢奸のはざまへ—中国国民政府による対日戦犯裁判で裁かれた台湾人」『台湾における戦後処理の問題点—台湾人処理方法と東港鳳山事件をめぐって』

藍適齊 Lan Shichi

一九七〇年生まれ。台湾国立政治大学歴史系助理教授。台湾史。『“Crime” of Interpreting: Taiwanese Interpreters as War Criminals of the Second World War』「言語能力がもたらした「罪名」—第二次世界大戦で戦犯となった台湾人通訳(潮田耕一訳)』(Re-)Writing History of the Second World War: Forgetting and Re-

membering the Taiwanese-native Japanese
Soldiers in Postwar Taiwan”

閻連科 Yan Lianke

一九五八年生まれ。中国人民大学教授、作家。
『人民に奉仕する』『丁庄の夢』中国エイズ村
奇談』『偷楽』『父を想う—ある中国作家の自
省と回想』『年月日』『炸裂志』（以上邦訳作品）

王堯 Wang Yao

一九六〇年生まれ。蘇州大学文学院教授、同
学術委员会主任。中国現代文学、『文革』
対『五四』及『現代文芸』的叙述與闡釈』『作
為問題的八十年代』『莫言王堯對話録』『中国
當代文学史の『過渡的状态』（邦訳論文）

堀井弘一郎 Hori Koichiro

一九五二年生まれ。日本大学非常勤講師。日
中関係史。『満州』から集団連行された鉄道
技術者たち』『汪兆銘政權と新国民運動—動
員される民衆』『日中戦争期、汪精衛国民党
の成立と展開』

馮青 Feng Qing

一九七〇年生まれ。明治大学非常勤講師。中
国近現代史・日中関係史。『中国海軍と近代
日中関係』『中華民国国民政府の海軍教育と
日本人教官』『張之洞の「湖北海軍」建設と
日本モデル』

木下光弘 Kinoshita Mitsuhito

一九七六年生まれ。敬和学園大学人文学部国
際文化学科専任講師。中国における少数民族
に関する問題、民族政策。「モンゴル族出身
の指導者ウランフ、その失脚と復活」「中国
の民族問題」「中国民族政策の背後にあるも
の—重要度を増す「中華民族」論』

やまだあつし Yamada Atsushi

一九六四年生まれ。名古屋市立大学大学院人
間文化研究科教授。日本植民地台湾社会経済
史。『日本の朝鮮・台湾支配と植民地官僚』
（共編著）『中国と博覧会 第二版』（共編著）

樋泉克夫 Hizumi Katsuo

一九四七年生まれ。愛知大学現代中国学部教

授。華僑・華人論、京劇史。「地球規模で版
図拡大する中国—水・陸・鉄・空路結ぶ計画
着着」「華人」がカギ握る中国経済発展」
『中国の「経済危機」に思う』

二好章 Nishio Akira

一九五二年生まれ。愛知大学現代中国学部教
授。中国近代史、中華人民共和国教育史。
『摩擦と合作 新四軍 1937~1941』『叙事詩の
時代の抒情』（翻訳）、『根岸佑著作集』全五巻
（編、刊行中）

加治宏基 Kai Hiromoto

一九七四年生まれ。愛知大学現代中国学部助
教。現代中国外交論、アジア国際関係論。
『米国が規定した「中華民国」の対外援助政
策』『国連開発デイスコースの中国による受
容と政策展開』『教養としてのジェンダーと
平和』（共編著）

翻訳者紹介

劉 靈均 Liu, Ariel Ling-chun

一九八五年生まれ。神戸大学大学院人文学研
究科博士後期課程。台湾セクシュアル・マイ

ノリテイ文学。「吳繼文『天河撩亂』における「同志」と「東京」」「安西冬衛詩集『軍艦茉莉』研究」

丸山菜和 Maruyama Kanna

一九九二年生まれ。神戸大学大学院人文学研究科博士前期課程。中国古典詩・建安文学。

寺地亜美 Terachi Ami

一九八八年生まれ。国際交流NGOピースポートインターナショナル・コーディネーター。貧困、環境、平和、人権、持続可能性など幅広い分野における通訳・翻訳。

和田知久 Wada Tomohisa

一九六九年生まれ。中部大学国際関係学部准教授。中国同時代文学。『現代中国の起源を探る 史料ハンドブック』(共著)、『石中蜈蚣』(翻訳)、『徐則臣「跑步穿過中關村」を読む』

南 真理 Minami Mari

一九八〇年生まれ。大阪市立大学非常勤講師。中国テレビドラマ論。「家庭倫理ドラマにおける劉慧芳式女性像」「中国テレビドラマ『走向共和』の新歴史観―その製作、受容をめぐる―」「エンターテイメントと政治性の結合―スパイドラマ『潜伏』」

学会通信

◎学会員活動(二〇一六年四月～二〇一六年九月)
黄 英哲 『漂泊與越境―兩岸文化人的移動』(台湾大学出版センター、二〇一六年七月)、『台湾文化人的「抗日戦争」』(愛知大学・大連理工大學共催国際シンポジウム「文化・文学―歴史與記憶国際學術研討会」於中国大連、二〇一六年六月二五日)

砂山幸雄 「揮代英的無政府主義特質及其歴史意義」(中国共産党設立九五周年記念国際シンポジウム「五四運動と中国共産党書記の指導者」、『人民日報』海外版・日本月刊 特刊、二〇一六年六月)

薛 鳴 「親族制度と社会変容―親族名称の使用方からみる日中の比較」(口頭発表、愛知大学国際中国学研究センター(IICC S) 文化的アプローチ班主催公開研究会、二〇一六年七月九日)

中国21 Vol.46 予告(17年3月刊予定) 特集●中国の芝居 ――昨日・今日・明日(仮題)

清末民初の燕都を生きた京劇戯作者・陳墨香の『梨園外史』は、「天地は一つの大きな梨園であり、梨園は小さな天地である。時を隔てること数千年、東から西への数万里。男と女。賢いお方と愚か者。誰でも、どんなことでも、舞台のうえに立ち現われる芝居の世界から逃れることなどできはしない」と書きだされている。

「天地は一つの大きな梨園であり、梨園は小さな天地である」――限られた空間でしかない舞台ではあるが、そこは時空を超越した豊饒無限の世界だった。

底なし沼のような社会の一片を切り取って表すこともできれば、七転八倒するような残酷も、哀切たたよう悲恋も、豪壮無比な英姿も、手に汗握る冒険も、抱腹絶倒のドタバタも、情念滾る愛欲も、煌びやかで艶やかな夢も、極悪非道への怒りも。凡そ想像できる限りの世界を紡ぎ出すことができる……それが芝居。

――こんな視点から、本特集を企画した。
【執筆】黎鍵、津田忠彦、佐治俊彦、魯大鳴、立石謙治、榎原真理子、村瀬栄治、樋泉克夫ほか

編集後記——中国に限らず、日本においても「私たちにとつて、戦争は終わっていない」「私の世代で、終わらせたい」という言葉をしばしば耳にする。そうした声をもつとも恐れているのは、人びとの忘却である。「もはや「戦後」ではない」と高らかに謳った一九五六年の経済企画庁『経済年次報告』（いわゆる「経済白書」）を引くまでもなく、一方で、個の心の痛みはナショナルなダイナミズムによって不可視化される。「東アジアの奇跡」の陰で、そうした声は戦争と現在の連続性を提起しており、「戦後」というデイスコースは、その連続性を包摂する。◇そして、「戦後」の連続性は冷戦期とオーバーラップし、さらには冷戦の終結後をもカバーする。一九八九年の六四天安門事件により中国的社会主義のひずみが世界に露呈し、年末にマルタでの米ソ首脳会談において冷戦の終結が宣言された。その後、一九九一年にソ連が解体したことで、冷戦構造が名実ともに崩壊した。「戦後」は冷戦後の世界をも射程に取り込む。殊に日本ではナショナルな総意として「戦後」デイスコースは同時代を敷衍する。◇他方で、「戦後」デイスコースは第二次世界大戦後の個やコミュニティの歩みを照らしうる。逆説的にいえば、一九四五年に始まる「戦後」という核の時代には、抑止力という共通認識を醸成した結果、国境や鉄のカーテンというカベが希薄になった。そして、このデイスコースは、安全保障に限らず日中関係、中台の兩岸関係の広範な人的諸問題を汲み上げるモジュールとなる。◇本号では、戦犯という個とナショナルなダイナミズムをとりまく歴史的事実から、今日的課題を紡ぎ出す力作を執筆いただくことができた。同時に、国家の正当性に光を当てる秀逸な論考を寄稿いただいた。これら両側面から、そして中国、台湾、英国、オーストラリア、日本の研究者の視点から「戦後」の意義を問いなおしたが、読者諸氏が、同時代としての戦後への視座を考察する一助となれば幸甚である。◇最後に、責任編集者として不備が多く発行時期が大幅に遅れたため、執筆者ならびに編集者、関係者各位にはご迷惑をおかけしたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。（加治宏基）

投稿原稿募集 新しい発想から現代中国をめぐる諸問題に切り込む、気鋭の論考を広く募集します。現代中国に関するテーマであればジャンルは問いません。むしろ、既存の学問のジャンルを打ち破るような斬新な発想を期待します。①未発表のものに限る ②論説、研究ノート、報告・ルポ、資料等=50枚程度、書評=20枚程度、エッセイ=10枚程度（400字詰原稿用紙換算） ③ワープロソフトで作成した原稿の打ち出し2部およびデジタルデータを提出。デジタルデータはeメールでの送信も可。

〈原稿送付先〉愛知大学現代中国学会 E-mail : china21@ml.aichi-u.ac.jp

投稿規程の詳細は現代中国学会までお問い合わせ下さい。採否は編集委員会の検討を経て決定し、採用にあたっては規定により薄謝を進呈します。なお、応募された原稿は採否にかかわらず返却いたしません。

中国21編集委員会

〔編集長〕黄英哲 加治宏基 木島史雄 高橋五郎 樋泉克夫 松岡正子 三好章

愛知大学現代中国学部 <http://www.aichi-u.ac.jp/college/chi.html>

中国21 Vol.45

特集 いまこそ、「戦後」を
問いなおす

2017年2月28日発行

ISBN 978-4-497-21704-2 C3036

編集 愛知大学現代中国学会
名古屋市中村区平池町4-60-6 〒453-8777
Tel. 052-564-6128 Fax. 052-564-6228

発行人 安部 悟

発売元 株式会社 東方書店
東京都千代田区神田神保町1-3 Tel. 03-3294-1001

制作印刷 株式会社 あるむ
名古屋市中区千代田3-1-12 Tel. 052-332-0861